

コラム

《腰折れ文》六、

渡邊澄子（会員）

今回は大事な問題を後回しにして、今日十二月十四日の新聞を採り上げたい。東京新聞朝刊は一面全面を「伊方3号 高裁が停止命令」、「米軍ヘリ窓 校庭に落下 重さ7・7キ 児童から十数人」、「『森友』撤去ごみ100分の1 194ト、国交省明かす」で埋められていて、朝日新聞は森友問題には関心が薄れたのか触れられず、他は同様。伊方原発運転差し止めについては、「東京」は更に2・3・5・7・28面で、「朝日」も2・37・38面で大きく扱っている。新規制基準が「適合」として再稼働を認めた原子力規制委員会の判断を否定して広島高裁が運転差し止めを決定したのだ。福島第一原発の事故後、初めてとなる高裁レベルでの差し止めの司法判断だ。司法の独立に疑い

を抱いていた私や多くの国民、とりわけ福島事故での被災者にとって涙のでる嬉しさだ。理性・知性は未だ生きていた。広島高裁の野々上裁判長の写真に、正義が歪められている昨今の時流を思い、「野々上さん、あなたは偉い！ よくぞ正義を貫いた。ありがとう、ありがとう」と声を挙げてしまった。涙がこぼれた。世界有数の地震国、火山国の日本に原発は巨大なリスクを抱えていることを国民の側に立つた極めて論理的な裁決だ。彼は二〇〇九年の原発認定訴訟で、初めて認定行政に関する国の責任に踏み込む判断を示して被爆者らへの賠償を国に命じる判決を下した裁判長でもあるという。「一強」の権威など意に介さず己の信念を枉げぬ彼のような人物がどうぞ沢山いますようにと、

無信仰者の私だが、思わず祈ってしまった。だが、彼は未だ六十四歳の若さなのに今月退官という。真つ当な司法確立のためにこれからも元気に活躍していただきたい。会いたいな。私にとって超重要な問題（今は内緒）へのご意見を聞きたいのだ。

横道にそれる。私は子どもの頃からジャンケンに勝ったことも籤に当たったこともない。十年程前歳末に高額の買い物をしたら籤券を四十枚渡された。籤運皆無と達観してるので断ったが当たりますよと押しつけられて行ってみたが結果は全部外れのティッシュペーパー四十個。年賀状は毎年五百枚位来る（最近減ってきた）が、お年玉ハガキは最低の切手シールが一、二枚当たれば万々歳。今年は早くも連日三・四枚の年賀欠礼が届いているが、父・母・夫・妻の永眠年齢のほとんどが九十歳以上で九十九歳、百一歳もあって驚いた。私はまだ死の覚悟なくケ・セラ・セラである。野々上さんはまだまだ若い。司法健

全化にご活躍いただきたい。

またである。米海兵隊の大型輸送ヘリコプターの操縦席横の窓が枠ごと、宜野湾市の小学校の運動場に落下。四年生と二年生の約六十人が体育の授業中である。奇跡的に危機一髪、惨事は免れたが生徒たちとは十層の地点だったという。圧倒的に沖縄に集中しているが米軍機の事故やトラブルは後を絶たない。翁長知事を先頭に県民の激しい怒りに政府も米軍も馬耳東風だ。決まり文句は官房長官の「あつてはならないこと」、防衛相の原因究明と安全が確保されるまで飛行自粛を要請し、外交ルートで「遺憾の意を伝えた」だ。伝えただけでは痛くも痒くもない。案の定、直ぐに再開され、容認している。沖縄差別の根幹は安保と地位協定だ。為政者の人権感覚に怒髪天を衝く思いでいる。「オール日本」で本土の犠牲にされている沖縄を差別から解放し、恥ずかしい米国追随でなく、日本を真の主権国家にしなければならぬ。